

あとがき

「社会思想史の入門書」の「あとがき」にこんなことを書くのは少しヘンだが、「社会思想史」とは、そもそも何を対象とする学問だろうか？

法思想史、政治思想史、経済思想史であれば、それぞれ、法、政治、経済に関する思想の歴史と考えればいいし、法学、政治学、経済学の基礎理論の発展史と不可分の関係にあると考えて間違いない。そういうことが主要なテーマであり、各テーマに関してどういうテクストを読むべきかも比較的是つきりしている。政治思想史であれば、国家論、社会契約論、正義論、民主主義論、権力論、公共性論などが重要テーマであることについて、ほとんど異論の余地はないだろう。社会契約論を研究するつもりであれば、ホッブズ、ロック、ルソー、カント等を読むのが定番だろう。

では、社会思想史は、「社会に関する思想の歴史」と理解すればいいのか？ たしかにその通りなのだが、「社会」というのはあまりに広く漠然としているので、何をもち「社会に関する思想」と言うべきかはつきりしない。考えようによっては、文学や科学評論、宗教なども含めて、全ての思想体系が、社会思想と呼べないことはない。

また、法思想史等の場合と違って、「社会」と名前が付いている学問分野である「社会学」との関係は極めて薄い——厳密なデータと方法論に基づくアカデミックな研究だけでなく、社会評論も社会学に含めて考えるのである。話は別だが。考えてみれば、当然のことである。法、政治、経済の制度が、その時代や地域を代表する理論家の考え方に左右されるところが大きいものに対し、「社会」全体のあり方を左右する理論家というのは、なかなか考えにくいからである。無理にそういう大理論家がいることを前提にして、議論をしようとする、おかしなことにな

る。

そういう曖昧さが根源的につきまとう「分野」なので、思想史系の学者としてちゃんとキャリアを積みたい人からは敬遠されがちである。その逆に、哲学、法思想史、政治思想史、経済思想史、歴史学、社会学、文学のいずれにも収まらない関心を持つ人、学問の放浪者のような人を惹きつける傾向がある——そういうとかつこうよく聞こえるが、実体はそんな華やかなものではなく、吹き溜まり感は否めない。

かつて、少なくとも一九八〇年代くらい前までは、日本のアカデミズムにおける「社会思想史」にはそれなりにはっきりした方向性があった。左派的、体制批判的な方向性である。元々、経済思想史系の研究者の中で、マルクス主義を中心とする社会主義やアナキズムなどに関心を持つ人たちが、「社会思想史」という言葉を使い始めたようである。そこに、ホップズ、ロック、アダム・スミス等、通常は自由主義系と見なされる思想家たちのテクストを、マルクスへと繋がる市民社会論（批判）の文脈で読む研究手法や、新左翼系の学生運動に影響を与えたドイツのフランクフルト学派（批判理論）とその周辺の思想家たちを初期マルクスと結び付けるアプローチ等が導入され、次第に学際的な左翼思想史の様相を呈するようになった。学会も設立された。（現存する社会主義国家のそれを含めて）既存の「体制」に対抗し、オルターナティヴを示そうとする思想の系譜を研究するのが、「社会思想史」のアイデンティティとなった。しかし、八〇年代末から九〇年代初頭にかけての、マルクス主義の凋落に伴って、左派思想全般に対する関心が弱まっていった。正統派マルクス主義とは一線を画していた研究者も少なくなかった「社会思想史」も、マルクス主義の補完物のように見なされて、次第に衰退していった。八〇年代後半に、東大駒場でそれまで社会思想史の大物が占めていたポストの後任人事をめぐって、「新旧左翼 vs. ニュー・アカデミズム」の対立が表面化したことも、その衰退に拍車をかけたような気がする。「社会思想史」を専門にすると、面倒なことになると、と改めて感じるようになった。若手が多かったのではないかと思う。

無論、九〇年代以降も、アルチュセール、ドゥルーズ、フーコー、デリダなどを經由したポスト構造主義的な理論や、ジェンダー・スタディーズ、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル・スタディーズ等、新しいタイプ
の批判的社會理論に関心を持つ若手はそれなりに出てきているが、「社會思想史」という共通項の下にまとまろうとする求心力はさほど働かなくなつたように思える。無理にまとまっても、あまり面白いことになりそうにないし、若手の就職先が増えるわけでもないので、当然のことかもしれない。

そういう現状を踏まえて、本書では、「社會思想史の復権」のような大それた目標を掲げることはあえてしなかつた。とりあえず、現在日本のアカデミズムで領域横断的に読まれている何人かの重要な批判的社會理論家たちを、「(脱)ヒューマニズム」という共通テーマの下で選び出し、個別に紹介するという形で編集することにした。現代思想の中心的テーマである脱ヒューマニズムに焦点を当てていふことと並んで、レーニン以降の思想史に限定したこと、フェミニズムが比較的大きな比重を占めていることを特徴として挙げるができるだろう。前半は、唯物史觀の理解をめぐつて論争したマルクス主義系の理論家たち、後半は、ラディカル・フェミニズムの方向性をめぐつて論争したフェミニズム系の理論家たちが目立つ構成になつてゐる。

本書を通じて、既成の社會秩序に抗つて考える、もしくは、その隙間を縫つて考えることの面白さを発見する読者が少しでも出てくれば、幸いである。

二〇一四年一月七日

金沢大学角間キャンパスにて

仲正昌樹